

2019年度 全体会議 議事メモ

日時 2019年12月10日（火）15:30～17:30

会場 エコパルなごやワークショップルーム

出席者：総出席者 28名（別紙全体会出席者名簿参照）

- ・ 実行委員 12名（学長、実行委員）
- ・ 事務局 5名
- ・ 関係者 7名（チーム員、アドバイザーボード）
- ・ 市職員 4名

寺西主幹の司会で定刻に全体会開始。

1 開会

【学長挨拶】

本日は、年末の大変お忙しい中、多数お集まりいただきありがとうございます。今年から来年は名古屋にとってあるいは世界にとっての節目。市民自らが立ち上がった藤前干潟の問題から20年、COP10から10年、ESDから5年。15年前になごや環境大学が設立された。あいち目標を達成するために初動の覚悟が必要。NGOの発議で日本政府が国連総会で、国連生物多様性の10年が定められ、中国の昆明でCOP15として、ポスト愛知目標にチャレンジする。この一連の流れの中で、名古屋は生物多様性の成果リレーをどう日本全国にリレーしていくのか。生物多様性の10年の一番大きな試みは、生物多様性の主流化。生態系サービスは天賦の環境であり、我々人間がこの地球に存在できるのは他の生物のおかげである。このしくみをどれだけ知ってもらうのが生物多様性の主流化であり、これに対してこの10年間それぞれの地域でどんな取り組みをしてきたのか。自省を込めて名古屋からスタートする。来年10月に開かれるポスト愛知に対してしっかり訴えていく。

名古屋は世界的な環境都市であるという理解は、私からしたら誤解がある。国際的な環境競争力がいちばん劣っているという事実がある。居住条件と環境がいちばん劣っている。悲しいことに居住にいたっては74位ぐらい残念な状況。やはり名古屋は産業都市でしかない。我々の暮らしに基づいた質のある都市に戻していくことは、なごや環境大学にとって非常に重要なテーマではないかという気がしている。とはいうものの、例えば災害のことを考えていくと名古屋が世界に教えることはたくさんある。「緩和戦略」という土木技術や建設技術をもって環境の変化に対応していくという方向はもう対応できない。自らのライフスタイルを含めた変化に対して「適応戦略」が結果としての環境負荷を軽減するいちばん大きな手立てであるという共通解が世界中で得られている中、堤防を積み上げて高くするのは従来の「緩和

戦略」。しかし輪中をつくってその中に閉じこもってやり過ごすのは「適応戦略」。この地域は世界に先駆けて、激甚化する環境に対して、しっかりと自分たちの生活の中での「適応戦略」を考えていた。世界に誇るべきもの。こういったところから、我々は名古屋の未来についてしっかり考えていかないといけない。

環境省は、環境基本計画の中に「地域循環共生圏」という構想をたてた。私が昔から言っている廃県置藩という考え。県を排して藩に戻れと。当時の藩は自立性を重んじた。お金の経済に対して特産品を開発して、エネルギー収支もできるだけ藩でまかなおうという戦略をとっていた。いま地方自治体の財政の足を引っ張っているのはエネルギーの収支。リンゴのような構造からブドウのような自活した構造に。ひとつ一つのクラスターがそれぞれの地域特性に合わせて生き残っていく戦略を描こう。そのかわりブドウが茎につながっているように、エネルギーと情報とエコロジカルとアクセス交通。このネットワークだけはしっかりと整備していく。これが「地域循環共生圏」という考え方。2つ目は、5年間かかったが、2021年度からスタートする第5次社会基本整備重点計画。この目玉がグリーンインフラになる。eco-DRRは、リスクを生態系を活用してリダクションするという考え方。生態系をもっと大事にしながら災害に対応できる社会に強めていく。この考え方が国土交通省の中でも、主要な施策として進められている。これも非常に意味のあること。トランスフォーマティブ・チェンジとって、社会的に大変容が起きる中で、なごや環境大学も最近では名古屋市内にだけに目を向けるのではなく、大都市は地域の自然があってこそ成立する。周辺の森林にも目を広げられようとしていることは大変うれしいこと。

グリーンインフラは入口。出口はグリーンコミュニティである。皆に共有できる自然の価値。コミュニティの力で自然と接触していく。手入れをしなくてはならない。グリーンコミュニティはものすごく重要なキーワード。

本日は皆さんに汗をかいていただいた成果と、なごや環境大学として新しい環境問題の時代にどう方向性を持つのかについて、しっかり議論いただきたい。

2 議題

- (1) 各実行チームの2019年度上半期の振り返りと課題について
【議題資料 1P~13P】

ここから涌井学長が議長役として議事進行を行う。

「議題資料」に基づき各チームリーダーから説明が行われる。
尚、各チームとも 2019 年度活動方針と取り組み事項が再度確認され、上半期の活動の振り返りと課題についての報告が行われた。

松本委員（企画チーム）・・・（議題資料 P1-2）

議案集のとおり。

吉田委員（活動サポートチーム）・・・（議題資料 P3）

議案集のとおり。

杉野委員（広報チーム）・・・（議題資料 P5-6）

議案集のとおり。

平石委員（ユースチーム鶴飼委員 代理）・・・（議題資料 P7-8）

議案集のとおり。

杉野委員（森林プロジェクト）・・・（議題資料 P9-10）

議案集のとおり。

→ 議長コメント：徳山ダムができて名古屋の水源が確保されたが、名古屋市長が水利組合の頭に立って、流域圏で考えていこうという流れもある。大都市と地域の関係をつなげていく動きは非常にありがたい。

蒲委員（大鹿代表幹事代理全体総括）・・・（議題資料 P11-13）

議案集のとおり。

（２）2019 年度 中間決算について

【議題資料 14P】

「議題資料」に基づき 2019 年度中間決算について事務局から説明が行われた。

<質疑応答>

[議長] 協賛金努力が欲しいと思いつつ、なかったということか。全体の収支のバランスは悪くない。

その他事業収入。ご努力での収入は極めて価値があると思っている。

また、先ほど予算の執行が動かしづらいとあったが、もう少し詳しく説明願いたい。

[事務局] チームごとに予算を立て執行している中で、なごや環境大学全体で情報を共有し、流動的に
お金が使える必要があると考えている。

[議長] 事務局のコーディネーション不足なのでは？ → [事務局] ご指摘のとおり

[増田] 協賛金収入について補足。お金で協賛だけではなく、場所を無料で貸してくれる等が多いのが

なごや環境大学の特長。数字に表れない部分もあるので、時価換算して備考欄等に書いて報告するのも重要なのではないか。

[千頭アドバイザー]なごや環境大学は昔から持ち寄りが多い。その情報を見える化できるとよい。チームの報告から入ったことに違和感がある。全体の報告がなぜ先でないのか。SDG s は行政よりも企業の方が先にいっている。次への課題は、企業からみたときに、なごや環境大学を使えば市民と何かできると見せられたら、きっとお金も入ってくると期待する。

[辻アドバイザー]予算を確保するのは大きな問題。自立するためには、名古屋市の予算を減らしてでも自分たちでお金を作る体制を取らないとだめだと思う。20年前に日本技術士会で全国大会を主催したときに企業から約1000万円集めた。集め方は1社5万円。人件費は名古屋市の予算でよいと思うが、その他の事業については、自分たちで集める努力も必要。

[議長]総括と関連するが、一番足りてないのは、SDG s はゴール (=到達点) であるということ。SDG s 認識が今の段階だが、どこでゴールするのが最終評価である。なごや環境大学がアシストしながら企業含めて色々なステークホルダーといっしょにゴールしましょうというのがよい。そうした姿勢をどういうふうに持っていくのか。それが財政をどうするのかのシードにもなる気がする。ゴールの部分がちょっと置いていかれている。SDG s へ関心があることだけがクローズアップされていて、最終的に2030年に向かってどう純度を高めていくのが必ず問われてくる。その戦略をどうなごや環境大学で作っていくかが大きな課題であると感じている。

悲しいことだが環境問題の激変化はだんだん可視化されている。COP25でも大きな問題となってくると思う。これまでの常識を捨てなければいけない状況になる。ヨーロッパでも相当な危機感がある。自動車産業はあと8年で壊滅的な打撃を受けるだろうと言われている。その次は何なのか。トヨタ自動車も車でなくモビリティとは何か、ライフスタイルとつなげながら体感する発信の仕方になった。車でなくモビリティでトヨタの技術団がチャレンジするという大胆な方向展開になっている。

SDG s のゴールと経済。なごや環境大学としても、協働をキーワードによりよいパートナーになる、より良いインストラクターになる努力をしていくことが、活動を広めていくし、自立にもつながる。これが半期の総括である。ここはぜひ松本委員に企画する中で考えていただければうれしいなと思う。これからの行政は多様なステークホルダーの幹事役だと思う。皆の意見を聞きながら、どういう楽しい宴会をするのかと一緒に、意味のある組織にしていればと思う。

[辻アドバイザー]森林プロジェクトへの質問。今の森林で問題は、森林の6割が個人所有で手入れされていないこと。森林プロジェクトは何を目的でやられているのかわからないが、昨日の台風でも倒木の処分をどうするのか。森林組合はどういう風に管理しているのかと合わせて、やっ

ていかれた方が皆振り向く。いろんな産業が出てくるがナノファイバー、バイオマス火力発電等の見方から攻めていくといいと思うが、森林プロジェクトはどのような立場でどのような動きをされているのか。

[杉野委員]今関わっている山は、林業としては成り立っていない、個人所有の山。地域活性化させるためにポイントがあって、前提は若者とよそ者がつくる。個人が困って森林組合も入っていない。山を活性化させる第1歩としたいと考えている。都会の人たちに森林のよさを伝えて欲しい。よそものから見たアイデアをまとめる。自分たちで森の問題を考えて行く人をつくっていくのが大きな目的でありねらいである。ある意味では楽しくイベント化する中で、荒れっぱなしであった森を手入れしたことで光が入った。その変化を地域の人参加者もみている。結論を急ぐことはできないが、少しずつ、やり続けると変わっていく姿をみせたい。「デザイン思考」を体験しながら自身の中として考えて欲しい。

[議長]私も森林文化アカデミーの学長として森林には関わっている。森林は5千ヘクタールの大地主がいるが、現実には日本の大多数は相続で所有してしまった1ヘクタール未満の持ち主が多い。地籍の確定ができない。私の大学でも中部大学と組んでドローンや人工衛星で、上空から森林の区画を浮き彫りにして、それと地積を突き合わせて所有者の確定をしていこうという研究を始めてる。所有と利用の分離を明確にしていきたい。所有者は経済的な利益を得たいとは思っていない。前向きな防災機能、後ろ向きな災害のきっかけになる。枝打ちをすればよいが、手入れを怠ると腐って倒木する。地籍の確定が重要。北九州の豪雨事例では、ためておいた間伐材が消火栓に堆積し、水と泥と残材が一緒になって地域を襲った例がある。

環境は災害ストレスがもっとも弱いところに直撃する。参考までに先日事務局にみてもらったが岐阜の森林アカデミーは相当の教育教材があるので、ぜひ利活用や実体験して森林が抱えている課題に取り組んでいただきたい。

(3) 2020年度活動方針について 【議題資料 15P】

蒲委員（全体の活動方針）

議案集のとおり。

[千頭アドバイザー] 本気で貢献を考えるのであれば、SDGs達成には169のターゲットへの対応について議論する必要があるのではと思う。

[議長] 確かに実際にやろうとすれば具体的なターゲットが必要である。

松本委員（企画チーム）

議案集のとおり。

吉田委員（活動サポートチーム）

議案集のとおり。

杉野委員（広報チーム）

議案集のとおり。

平石委員（ユースチーム）

議案集のとおり。

杉野委員（森林プロジェクト）

議案集のとおり。

増田委員（SDGs未来倶楽部）

議案集のとおり。

[長谷川アドバイザー] やっとプロジェクトが動き出してうれしい。SDGs 単独でやっているところは多いが、円になっていない。SDGs まちづくりプロジェクトは、本当にやってねと思っている。実行委員が他部局と関わっている人が多いので、環境局がうまく橋渡しをして、そこで得た情報をうまく取り入れて欲しいと思う。応援はしたい。

[岸田アドバイザー] SDGs をどう進めていくか苦労している企業が多い。活動サポートチームについて、団体のスキルアップですが、私自身に関わるとしたら 20 年来組織運営してきたので、組織運営やマネジメント等団体の底上げの力になれるかもしれない。必要あれば声かけを。

[前田委員] ユースチーム学生の卒業問題について。大学の授業でもユースチーム企画のイベントの広報を協力しているが、イベントのチラシの紙面の大部分は内容や申し込み先、準備で関わっている学生さんたちの思いや、どんなことがよかったのか生の声で伝えるチャンスが少ないのでは思った。イベント内容のチラシだけでなく、加えて活動してどこがよかったかなど、ユースチームの学生の声を紹介するものを現在の学生がいるうちに A4 用紙 1 枚でいいので楽しそうなレイアウトで作成して、イベントそのもののチラシと一緒に配れるようにするとよいのでは？

[横山委員] 環境問題は森に入って体験する等フィールドが大事。今後の森林プロジェクトに、どのように学生を巻き込むことができるのか考えている。中日新聞と組んで作成したドアラのエコバッグをエコプロダクツ展もっていったら声をかけられ、コミュニケーションが生まれた。ユース事業を進める際は、学生が主体となるのにどういった場が与えられるのか。やらされ感をなくしていかに自主的にやっていくのか。また学んだことをやりっぱなしにしない視点が大事。

[平石委員] 横山委員の名古屋外国語大の学生に、ぜひユースチームに入ってほしい。前田委員

の指摘のとおり。現実的にいろんな場をまわるのは難しい。冊子に載せて広報することは考
えている。

[松本委員] 次年度の動きとして横軸。環境大学だからこそできること。もっと具体的に実のあ
る動きをしていくために、たくさんのプロジェクトを持っていくとよい。ぜひアドバイザー
の力をもっと貸していただいて課題を解決していきたい。

[野中委員] 企画や事業、イベントをするときにまず自己紹介をする。理念を読んでもなかなか
伝わらない。表現を聞いて頭に入るように作りかえたものが欲しい。

[杉野委員] まとめたものがある。まずそれを見ていただいて意見をもらえれば欲しい。

[緒方委員] 学長に定義していただきたい「未来志向」がちんぷんかんぷんであった。

[議長] 四つ葉のクローバーは何か。3つは愛情・誠実・幸運で定着している。あと1つ「未来
に夢や希望が抱けるか」の可能性。未来志向は、未来の豊かさには限界があると理解したう
えで、いかにバックキャストして今何が必要か、限界を知らながら考えていくこと。そのた
めに何が必要といえれば協働である。

[山口委員] 本業は建築士なのだが、行政は縦割りで横のつながりがないと実感している。緑政
土木局、上下水道局、住宅都市局、観光文化交流局、名古屋市は最先端をいって横のつな
がりを強化していただきたい。

[議長] ぜひ検討いただきたいのだが、企画の方に、ライフスタイルの表現の中に「ワークスタ
イル」の文字を包含して入れていただきたい。今後の日本の経済発展にはイノベーション力
でなくクリエイション力が重要。個が確立してしかも自由であって、そこに環境があって初
めてクリエイション力が発揮できる。如実に明らかである。

(4) 2020年度実行体制について 【議案集 17-18P】

寺西主幹より説明。

[議長] 体制の話は、この場だけで簡単に決められることではない。別途、幹事会を開いていただ
いて、きちんと議論するべきである。

(5) その他

議案のすべてが了承されたことを確認し、終了。

3 閉会

寺西主幹より本日の予定がすべて終了したことを伝え閉会。

以上

※全体会議後、「ガイドブック表紙コンペティション」最優秀賞の表彰を行う